
Let's play a game

夢希 悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let's play a game

【Nコード】

N9999N

【作者名】

夢希 悪

【あらすじ】

主人公・師須賀^{しすか} 枯鳥^{こじり}は見た目は可憐でクールな少女。しかし生物学理上や中身は男。ある日、なんか目覚めたら可愛いシヨタがいて、不思議の国のくせに魔王だか魔女だかなんだかがいる国に召喚される。しかも勇者ならぬアリスは何人もいるとか！？その中の一人として枯鳥は世界を救いに行く……「あー？…もう面倒だから傭兵でもやとって行かせればいいんじゃないね？」

第一話：シヨタって萌えるな…意外に

不思議に国のアリス。

そこは名の通り不思議な国。

僕の記憶上では、アリスが二足歩行（という四足歩行を普通としている動物にとってありえない二本の足で歩く行為）で走るウサギを追いかけて

「あらあらまあまあ」

なんて、感嘆をもらし身を滅ぼす好奇心とやらをフルに発揮させてウサギを追いかけて、女王に目をつけられて、結局は

「という夢を見たのさ」

であっけなく終わる物語。

ん？間違ってる？

いや、あながち間違いではないはず。

まあ本音を言うと、不思議の国のアリスなんて一度も読んだ事ないし……。

んでー…面倒なので軽くはしよるよ、今の状況を。

目の前に、ウサ耳生やした可愛らしいシヨタとトランプの柄というか服全体がトランプのきぐるみ的なのをきてる人が数人に囲まれてたりします。

なんかアリスイメージさせるんだが…。

くっ、と現実逃避をするために目頭を軽く押さえると何を勘違いしたのかシヨタが心配そうに焦りながら、耳を動かす。

「あのあの！大丈夫かな？えっと……大丈夫なのかな？」

「ああ…大丈夫だ…いま着々と現実逃避してるから…」

おし…出来ない。

いやいやいやいや…なんだよこの状況は…。

「落ち着いたのかな？あのねあのね…落ち着いてくれたのかな？」

落ち着いた、俺が落ち着きたいのと違う意味で落ち着いた。

「よかった！ぼくね、安心したよー」

ほっ、と胸をなでおろすように安心した様子で百万カラットに近い笑顔を見せる。

同時に耳も気が抜けたようにへなへなとしおれていく。

ふむ……実に面白い。

さわさわして、なでなでして、もふもふしたい。

すると、しおれていた耳をぴんと元気よく伸ばすと俺の手を握って、立たせようとする。

「君で最後なんだ！最後なんだよっ？」

「はあ……あぁ…？」

俺の手を引く張ると、地下らしき部屋を出る。

外の廊下は王宮のような赤いカーペットに大きな窓、明るい日が窓から入っている。

昼間なのか？とかいうどうでもいい思念を、欠伸でかき消す。

そして人懐っこそうに、にこっと笑いかけるシヨタを改めて観察してみた。

服装は白いブラウスに、枯葉色のネクタイ。首から懐中時計をぶら下げ、ズボンはネクタイと同じ色にチェックがはいった可愛らし

い短パン。

髪の毛は金髪で短く、顔は可愛く整っている。目も大きく、翠色のビー玉でもはめた様な綺麗な瞳。

ほう……これは将来えらいべっぴん確定だな。

しかし、残念ながら俺は男には興味がない。

いや、まあ言い寄られたら相手はするが興味はない。

むかしから、普通の人よりも女っぽい外見のせいで女よりも男にモテた記憶しかない。

俺の黒髪は肩ぐらいで男にとって長い、女には丁度いいくらいの長さで（一般的にはストレートボブだかどつかのボクサー的な感じの名前らしい）目も普通よりは大きく、据わっている。はっきりいって、喉仏もあんまり無い。

声が高いのはそのせいかな？

背も微妙に小さく、言うならば女みたいなのだ。

ああ、そうさ……そのせいであんまり良い人生じゃねーよ、このやろー。

「どうしましたのかな？……どうしたのかな？」

心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

可愛いなこのやろー……。

と、口に出しかけた言葉を（ありもしない）喉仏らへんで食い止めると、なんでもないよーと柄にもなく優しく頭をなでる。

ついでに耳も触ってみる。

ふにふにして、気持ちいい……。

シヨタはふにやふにやと顔を緩ませる。

ふむ……これなら嫁にほしいかもしれない。

「ふにゃにゃ……で、でわでわ……ここが大広間になりますっ。既に皆様お集まりでございます」

そういつと、自分の何倍もありそうな大きな扉の目の前で行儀良くお辞儀をした。

ふむふむ……この中に人いっぱいいて、俺がここにいる理由がわかるわけなんだね？

「よし……案内ありがとな」

「い、いえ！ぼくは貴方様の様な美女（美しいお方）を案内できて光栄です！」

「……………そっか」

あれ、俺って生物学理上性別雄だとおもっただけど。

ついてるよな？ああ、ついている。

まあ落ち着け……子供には俺という下劣な奴からにじみ出る男らしいというオーラが認識できるはずがない。

落ち着け。

「大丈夫、落ち着いた……」

「大丈夫かな？大丈夫なのかな？」

「……おう」

ではでは、と仕切りなおすと腕を伸ばし、体をほぐす。それを大人しくシヨタは見つめる。

「じゃあ……行くか」

「はい！……」

と、扉とは逆の方向……元来た道へと歩き出す。

そっだよなー……流されるようになってきたけどさ……ここおかしくね？

まあ行こうか。

俺がさっきまでいた部屋に。

んで、全員フルぼっこ確定……家にかえれんだろうな？

第一話・シヨタって萌えるな…意外に（後書き）

不思議の国を舞台に一回魔王退治をやりたかったんです…ごめんなさい

第二話・王様はどつやら生音しか興味が無いようだ（前書き）

短いです

第二話・王様はどうやら生音しか興味が無いようだ

ギィ、と目の前の大きな扉が軋む音を響かせ、開く。

「もう…困りますう……。困りますです」

これまでのいきさつを語ろうか、面倒だけど。

脱走を図ってみた。が、シヨタに捕まって泣きながら逃げないよう
うにお願いされた。

以下略。

「大丈夫だよ……もう逃げないよ」

嘘だけど。

でも帰るだけで、逃げるんじゃないよ？

「むう……」

まだ納得していないように、視線を落とすが軋む音が止み扉が開くと、顔を上げる。

シヨタが進むのに着いていく様に、部屋の中に入る。

中を簡単に説明すると、王宮みたい。以上。

中に入ると、俺の様な人はいないが、階段の上のゴージャスな椅子に偉そうに座るヒゲの中高年におび跪く様に合計六人いた。

「かの者で最後か？」

「はい！…確かにこの方で最後になります！なりますですよ！」

階段の上のゴージャス（以下略）は低い声でシヨタに言うと俺に前に出るように促す。

どうしたらいいか分からないから、短く「はい」と言うと、回れ右をして部屋から出る。嘘だけど。

前に進み、一番左に他の皆に合わせるように立て膝で跪く。

「うむ……では右から名を名乗れ」

偉そうにそう言うと、一番右にいた緑色の髪をした少年が顔を上げる。

「はっ！私はアブホース・リンストといいます」

「アブホースか……分かった。では次の者」

次は赤い長い髪をした青年が顔を上げる。

「私はトゥールス・チャーです」

「トゥールス・チャー……チャー家の跡取りか」

「はい。しかし私は、家の名前を駆使しようなど汚い考えは持っておりません」

「……そうか。では次の者」

順番にイケメン（撲殺してえ）が自分の名前を名乗っていく。

そして、面倒臭い事に自分の番が来た。

仕方がないな……ここは大人しく……

「名はなんと申す」

「……………チャールン。問題です、俺の名前は何でしょう？制限時間は無限大…しかしノーヒント。さあ、どうする！？」
「！？」

問題でもだすか……………。

階段の上の（以下略）は驚いたように俺の顔を見る。
周りに控えていたらしい兵士は持っていた、長い槍を俺に向けてくる。

「無礼な小娘が…！」

「王に向かってその口の利き方は何だ！小娘だからといっても容赦はせんぞ！」

いや……………もうそのギャグはうけないから。

うんうん、だから思ってもないギャグの小娘はいらねーよ？
だから早めに訂正しようか。怒っちゃーうーよー？

「よい」

「しかし……………っ！」

「お主にもう一度問おう…名はなんと申す」

なんだよ……………俺が悪い見たいじゃん…。

あーはいはい、真面目にやりますよ。

「……………てってーん。問題で」

「もういい」

あれ？効果音が気に入らないんじゃないの？

それとも本場の音じゃないとイヤですか？擬音語はイヤなのか？

我儘な王だなあ……。
あれ？なんか違うかな？ま、いつか。

「あの…あの…！」

可愛いらしいシヨタの声が重苦しい部屋に綺麗に響く。

癒しだね、あの子は。

一家に一台、おk？

「なんだ？」

「いえ……あのあの……その方は分からないんじゃないんでしょうか？と、疑問を持ちました」

「分からない……だと？」

あー……だめだめ。

理解できない。日本語でおk。

つかここ日本なの？ドッキリ？ビックリカメラで撮影中？バカデミー大賞でもねらうの？

いやいや……にしても出来すぎ。完成度高いでしょ？むしろ出木^{でき}杉君^{すぎ}？

「分からないけど……髪とか眼とか黒だから異界からではないでしょうか？」

「異界……？」

その言葉に周りの人が息を呑んだ。

「分からないんですよ！？多分ですけど……異界の人が召喚されるのは前回にも例があります……あの……この方みたいな喋りではありませんでしたが、黒髪の黒い眼……同じでしたので……」

「確かに………かの者よ……お主は違う世界から来たのか？」

ん？なんか厄介事？

だったら丁寧にお断りしたいんだけど……「面倒だからイヤ」だつて。

まあ、しかし俺には野望というものがあるんだ

「………ちゃーらん……さて、どうでしょうっ？」

知らない人にはむやみに自分の情報を流さない。

これ、大事でしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9999n/>

Let's play a game

2011年10月9日19時13分発行